

国語 (六〇分) 答えはすべて解答用紙に書き入れること。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「リンゴ」という言葉は、あの甘酸っぱくて赤い果物のことを指す。「痛み」という言葉は、身体に感じるあの感覚のことを指す。しかし、もちろん「リンゴ」は本物のリンゴそのものではないし、「痛み」は本物の痛みそのものではない。だから、言葉とはそれが指し示す対象の影ないしは模造品のようなものだ。しかも、不完全な模造品だ。――^①コライ、多くの人がそういう思いを抱いてきた。

「リンゴ」という言葉は、リンゴ独特のあの風味も、その微妙な色合いも、そして、個々のリンゴの繊細な差異も、すべて曖昧にし、乱暴にまとめてしまう。同様に、「痛み」という言葉は、個々の痛みの^②サイズも違いもすべて^③ペイバンに塗りつぶしてしまう。世界に存在する個々の物事を「リンゴ」や「痛み」といった言葉に置き換えて抽象化してしまうと、そこでは多くの重要な具体性が捨て去られ、見失われることになる。世界を余すところなく表現するには、言葉はあまりに解像度が低く、粗雑すぎる。そのように思えるのだ。

あるとき、私はお腹に強い痛みを感じて、「痛いー」と口に出す。側にいた友達が、心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれる。**A**、当たり前だが、「痛いー」という言葉は痛みそのものではない。私がどんな痛みをどれほど感じているのか、あるいは、そもそも痛みを感じているのかどうか、友達は正確には分からないだろう。また、逆に、友達が「痛いー」と言っても、私には、それが本当のところどのような痛みなのか分からない。友達が「うれしい」と言っても、どんなふうによろしいのか、どれほどうれしいのか、あるいは、そもそも本当にうれしいのかどうか、私には分からない。

²こうしたもどかしい思いは、本物の影ないし模造品として言葉を捉える見方を強める。つまり言葉は、世界のなかにその一部として存在するわけではない。私と世界のあいだに、世界の影（模造品）として存在する奇妙な何かにすぎないというわけだ。繊細で鮮烈な本物と、それを表す言葉とを比較すればするほど、言葉がそれ自体としては抽象的で、^④カンセツ的で、空疎な影のように思えてくるのである。

B、言葉がそのような、本物を不正確にしか表現できない影ないし模造品であるのならば、それを用いたコミュニケーションはどうしても粗雑で不完全なものになってしまわないだろうか。

本当に模造品に過ぎないのかどうかはともかくとして、言葉が誤解されやすいのは確かだ。**C**、誰かと一緒にケーキを食べているときに、とても美味しいことに驚いて、「このケーキやばいー」と叫んだとしよう。しかし、それを聞いた相手は、このケーキはとんでもなく不味いとか、傷んでいるなどと誤解するかもしれない。

D、「このケーキ、あんまり甘くないね」という言葉も、良い意味で言ったはずが、相手には、甘みが足りないと批判しているように聞こえるかもしれない。³こうした理解の食い違いは、短い文字や記号でやりとりをするLINEなどのSNSでも――あるいは、この種のコミュニケーションにおいては特によく生じていると言える。

また、現在のSNS空間は、個人の言葉が瞬時に拡散するために、言葉を発した本人が想定していなかった大きな影響を社会に与えてしまうケースが跡を絶たない。たとえばある人が、あるお店の店員の態度に気分を害し、そのお店に対する抗議をSNSに投稿したとしよう。すると、その言葉がたたくさん「リポスト（リツイート）」「シェア」「いいね」などをされて拡散し、そのお店に思いがけず非難が殺到したり、逆に、そのお店を支持する人々からの反論や非難が投稿者のほうに押し寄せたりすることがある。

E 抗議の内容が事実に基づいているとしても、また、非難自体は理不尽なものでないとしても、勢いが度を超してひろがり、言葉を発した本人がその拡大を制御できないという事態がしばしば生じているのである。

だとすれば、こうしたコミュニケーション上の事故や制御不能な状態が発生しないように、⁴言葉を用いるときには常に事細かに説明を尽くすべきだろうか。しかし、たとえば、「このケーキは今年食べたもののなかで最もよくできている」と言ったとしても、「このケーキやばいー」という叫びほどには驚きや感動は伝わらない。また、「このケーキ、あんまり甘くないね。で、この『甘くない』というのは今はネガティブな意味で言っているわけではなくて、むしろポジティブな意味で言っているんだよ」などと長い補足をいちいち加えていては、聞いている相手を退屈させたりうんざりさせたりすることになる。要は、そのような説明は面倒でつま

国語

らないのだ。

一般的に言って、くどくどと長く言葉を連ねることが、自分の思いや事実などを正確に伝えられることにつながるとは限らない。ケーキの味や香りや口当たりを完全なかたちで言い表すことは、どれほど凝った言葉を積み重ねたとしても不可能だし、海と空が融け合う色合いの美しさは、どれほど言葉を付け加えたとしても再現できるものではない。説明しすぎることは、聞き手を飽きさせ、言葉を野暮で余計なものにしてしまう。

また、丁寧すぎる長い言葉は、親密な関係やくだけた場にならわしくなり仰々しいものになりがちだし、時間がかかるためコヤリツが悪く、そして面倒だ。それから、個々の言葉に対する捉え方の違いや、語彙力の違いなどによって、言葉を積み重ねれば積み重ねるほど互いの言っていることが分からなくなってしまう、ということもある。つまり、簡潔な言葉では不足なら、詳細な言葉に置き換えればよい、というわけではないのだ。

このように、言葉には、不正確なや不完全な、曖昧なや不確かさ、つまらなさや退屈なといったものを帯びるおそれがつきまとう。しかし、それでも、言葉は私たちの生活に欠かせないものだ。

たとえばお腹が痛いとき、あるいは、誰かに何かをしてもらってうれしいとき、「痛い」や「うれしい」といった言葉を発することなしに、そのことを他人に分かってもらうのは簡単ではない。また、家の近所に新しいケーキ屋ができたという事実を、「家の近所に新しいケーキ屋ができたよ」といった言葉を用いずに他人に知らせることは困難だ。

〔中略〕

はたして言葉とは、私と私以外の人々とをつないでくれる「媒介物」なのだろうか。それとも、両者を隔てる「障壁」なのだろうか。私たちの可能性を広げてくれる希望なのだろうか、それとも、私たちを縛ったり振り回したりする制御不能な巨介者なのだろうか。そのどちらでもあるのだろうか。あるいは、どちらでもないのだろうか。

(古田徹也『言葉なんていらない? 私と世界のあいだ』)

【語注】

- (注1) 抽象化 … いろいろなものを、その共通点から一つにまとめること。
- (注2) LINE … スマートフォンやパソコンにおいて用いられる無料のメッセージアプリ。日本国内で広く普及している。
- (注3) リポスト (リツイート) … SNS「X (Twitter)」において、あるアカウントによる投稿を、別のアカウントが再度投稿すること。

問一 ――部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(楷書で、ていねいに書くこと)

問二 ～ に当てはまる語として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は何度も用いてはいけません。

ア しかし イ もしも ウ たとえば エ まだ オ たとえ

国語

問三 ――部1「りんご」は本物のりんごそのものではない」とありますが、どういことですか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「りんご」という言葉は、甘酸っぱくて赤い果実のことを指しているのに過ぎず、本物のりんごが持つ具体的な特徴を捉えられないのだということ。
- イ 「りんご」という言葉は、比喩をはじめ本物のりんごとは無関係な場面で用いられることがあり、本物のりんごを指すとは限らないのだということ。
- ウ 「りんご」という言葉は、世界を余すところなく表現するには解像度が粗雑すぎるため、本物のりんごとは似ても似つかない存在であるということ。
- エ 「りんご」という言葉は、本物のりんごが持つ具体的な特徴をあまりにも雑に表現しているので、本物のりんごを意味しようがないのだということ。
- オ 「りんご」という言葉は、本物のりんごを、その具体的な特徴を捨て去り抽象化したものであるため、本物のりんごとはかけ離れているということ。

問四 ――部2「こうしたもどかしい思いは、本物の影ないし模造品として言葉を捉える見方を強める」とありますが、どういことですか。八十字以内で説明しなさい。

問五 ――部3「こうした理解の食い違いは、短い文字や記号でやりとりをするLINEなどのSNSでも――あるいは、この種のコミュニケーションにおいては特によく生じていると言える」とありますが、なぜ「こうした理解の食い違い」が「LINEなどのSNS」では生じやすいのですか。考えられることとして最もふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア やりとりの行き違いを完全になくす、詳細に物事を説明するという効果的な方法が記号表現の制限されたSNS上では困難であるから。
- イ 短い文字や記号でやりとりをすることが強いられるため、相手の気持ちを十分に配慮したメッセージを送る難易度が高くなるから。
- ウ 相手の表情や口調といった情報が見えず、短い記号のみでのやりとりがなされるため、そのメッセージに解釈の幅が生まれやすいから。
- エ 発言された内容が他人によつてあつという間に拡散されるため、発言者の想定を超えて社会に大きな影響を与えてしまいかねないから。
- オ 一度発言した内容が半永久的にネットの海に残り続けてしまうため、発言者の軽率な言葉が生んだ誤解を正すことは極めて難しいから。

問六 ――部4「言葉を用いるときには常に事細かに説明を尽くすべきだろうか」とありますが、これに対する筆者の考えとして誤っているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 事細かに説明を尽くす発言は、瞬間的に感情を表す「叫び」と比較すると、発言者の感情が伝わりにくい。
- イ 事細かに説明を尽くすことは、堅苦しい印象を相手に与えてしまうことがあり、親密な場面には合わない。
- ウ 事細かに説明を尽くすことは、正確に伝えるためには絶対に必要だが相手を退屈させるという矛盾がある。
- エ 事細かに説明を尽くそうと言葉を重ねていけばいくほど、かえって相手を理解から遠ざける可能性がある。
- オ いくら事細かに説明を尽くそうとしても、物事を完璧な正確さで説明しきることはそもそも不可能である。

問七 ――部5「私と私以外の人々とをつないでくれる「媒介物」なのだろうか。それとも、両者を隔てる「障壁」なのだろうか」とありますが、どういことですか。百字以内で説明しなさい。

国語

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「僕」(夏見翔)は、言葉の読み間違いや言い間違いをしてしまうことが多く、そのことでクラスメイトを笑わせていたが、実際にはそれらは意図したものではなかったため、笑われることに対して違和感や悩みを抱えていた。しかし、クラスメイトで、口数の少ない少女・中島まほりだけは、「僕」の無意識の言葉の間違いを理解してくれるのではないかと感じており、「僕」は彼女に対して好意を持っていた。次の文章は、「僕」の通う中学校で体育大会が行われる場面である。

いつもは最前列に陣取る母親の姿が見えない。今年は来ないつもりだろうか。
雲が厚いおかげで、炎天下の辛さからまぬがれた。去年の体育大会は死ぬかと思うほど暑かった。
母親が兜のような黒い帽子を被り、サングラスに黒の長い手袋をはめて、奇声をあげて応援するので、戦国武将の幻を見ているのかと思ったほどだ。

今日、僕は二〇〇メートル走では一位だった。でも、あれほど練習したクラス対抗リレーは最下位になった。
中島まほりの前までは一位くらいで来ていた。いい位置で僕にバトンがきて、トップを狙えると思っていた。中島まほりにバトンを渡すやつが焦ったのだ。ほんの少し彼女の手のひらの位置に届かなかった。バトンが落ち、それを拾おうとしてしゃがんだところに、C組の太った男が飛び込んできて中島まほりを突き飛ばした。それでもすぐに立ちあがってバトンの落ちている場所を探し、それをつかんで走り出すまでが素早かった。ものすごく運動神経が良いひとなのだと確信できた。

なのに、デブのそいつが大声を張り上げたのだ。「そのバトン、うちのだろ」と。
彼女のせいじゃないのだから、バトンを間違えていたって、そのまま走ればよかったのだ。でも、中島まほりはそのまま走らなかった。それもそうだ。¹彼女は中島まほりだ。もとの場所までもどり、デブのあとの走者にバトンを渡し、自分の黄色いバトンを離れたところまで拾いに行き、最下位になって僕のところまで走ってきた。

かなり差がついていた。僕は中島まほりのために何人が抜かそうと思ったが、どんなに力を振り絞っても追いつけないまま最下位でゴールした。
終わってから中島まほりは僕の顔を見ようとせず、応援席にもどるときにも、もどってからもずっと下を向いていて頬や耳を赤くしていた。だれも彼女に声をかけず、ひとりでうつむいているので、僕も話しかけられないでいた。

バトンを受け取るときに、ひとこと言えばよかった。「大丈夫だよ」だとか「よくがんばったね」だとか。僕はばかだから、むっつりとしたままバトンを受け取った。きっと怒っているように見えただろう。

「夏見君」
クラス代表のメガネの女子が僕をよぶ。

「ごめん、言ってなかった。このあと逆転チャンス競技っていうのがあってね、夏見君が推薦されてたの。早く行って」
推薦したのが山上なのは明らかだ。早くと急かされていやだとも言えず集合場所に向かった。何をするのかもわからなかったが、前の走者を見るとグラウンド中央に並んだ紙をひろい、中を見て、あちこちに走り、靴やらハチマキやらを手にしてまた走っている。借り物競走というやつだ。

ゴールテープを持つ係には、中島まほりが入っている。元気のない細い肩でばんやり立ち、胸の真ん中にあてて持っているゴールテープすら重そうだ。

僕はスタートしてから一番に紙を開いた。書いてあることを理解するまで少し時間がかかった。
誰かに訊いてみなくては。なんのことを書いてあるのか、誰かに確認しなくては。視線をあげると、ゴールテープを持った中島まほりがこちらを見ている。僕はまだ借り物をしていないのにゴールに向かった。

「ねえ、中島さん」
息をきらして言うと、中島まほりはテープを持つ手を²きゅっと握って硬くなった。
「³イボウシってなに？ カエル？」

国語

借り物が書いてある紙を差し出した。

「赤いんだって」

中島まほりが覗きこむ。

「え、これ……」

「赤の、イボウシだって」

彼女は一瞬^a 目をまるくして、

「これ、赤いボウシ……」と、消え入りそうな声で言った。

「え、赤いボウシなの？ 僕、カエルかと思った」

「カエル？」

「ほら、イボガエルとかウシガエルとか」

「赤ガエルとか？」

「うん」

中島まほりはふちの赤くなっていた 目^bを細くして、テープを持っていないほうの手で口もとをおさえ、「へっ」と舌をあげて笑った。そして、僕の目を見ながら肩をゆらし、からだを前へ折り曲げた。

「借り物に、カエルなんて、ないよね」

本当は赤いボウシと、何とか読めていた。最初に見たときにカエルのことかと一瞬思っただけで、そのあとにすぐ帽子と書いてあるのだとわかった。でも、僕のこの、おばか頭を使えば、中島まほりと話せるかと思った。こんな頭でも計算はわりと速いんだ。

僕がずっとゴールしないのをクラスのやつらが気づいて叫んでいる。

「なにやってんだよー」

山上の声だ。借り物競走のことを思い出した。

「あそこ」

中島まほりが指さす先に朱色^cのツバ広帽子が見えた。保護者席の後ろのほうに見えるそれを目指して走った。

近寄ると見覚えのある細長い体型だ。母親だった。黒ずくめの服装に朱色のエプロンをつけ、同じ色の帽子を被っている。PTAの腕章^dが見えるので、係の仕事をしていたのだろう。

「貸してね」

帽子をはぎ取ると母親は目と口をぱかんとあけた。油断した顔が子どもみたいで面白かった。それを自分の頭に被るとすぐに引き返した。

ほかのひとはもうとっくにゴールしている。焦らずいつもの速さで走り、じりじりでテープをきった。テープを持つ中島まほりと目があつた。口をおさえてまだ笑っている。

僕はグラウンドの真ん中まで走っていき、両手で一番をつくり高く掲げ、飛びあがった。かなり高く、カエルみたいに。自分で考えた勝利のポーズだ。着地したときに尻もちをついて転がった。

山上が大きな声で「ばーか」とツッコみをいれてくれた。

応援席から笑い声があがり、⁴中島まほりの口元に白い歯がのぞいた。

それが僕の、僕だけの宝物に見えた。

(神田茜『僕の守る星』)

問一 ―――部 a・b の表現の意味を十字以内で説明しなさい。

国語

問一 ――部 1 「彼女は中島まほりだ」とありますが、ここでの「僕」は中島まほりのことをどう思っているか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア バトンの取り違えへの指摘に真面目に対応したところから、物事に真剣に向き合う人だと感心している。
- イ バトンを落とした自分のミスを素直に認め、わざわざ拾いに行くほど誠実すぎる人だとがっかりしている。
- ウ 人を見た目で判断せず誰に対しても優しく接する人だと日々の会話の中で感じ、好意的に見つめている。
- エ 僕の話をいつも優しく聞いてくれるまほりは、自分を甘やかしてくれる理想の存在だと運命的に感じている。
- オ 自分がリードしたにもかかわらず、足が速いためにチームを負けさせてしまった問題児だと頭を悩ませている。

問二 ――部 2 「きゅっと握って硬くなった」とありますが、この時の中島まほりの心情を説明した文として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「僕」に声をかけられ、リレーの責任を迫られるのではないかと恐怖を感じる気持ち。
- イ 声をかけられるとは思っていなかった「僕」に声をかけられ、戸惑う気持ち。
- ウ 「僕」が拾った紙に書かれた物について話すと思い、何が出てくるか知りたい気持ち。
- エ バトンを取りこぼした経験から、ゴールテープを落とさないよう用心する気持ち。
- オ グラウンドの中央に立たされ、周囲の視線が気になって落ち着かない気持ち。

問四 ――部 3 「イボウシってなに？ カエル？」とありますが、このときの「僕」のこの発言の意図を説明しなさい。

問五 次の会話文は、――部 4 「中島まほりの口元に白い歯がのぞいた。それが僕の、僕だけの宝物に見えた」について、問題文を読んだ生徒 A と生徒 B のものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

- 生徒 A 「白い歯がのぞいた」ということは、中島まほりはきゅっとこのとき【 A 】ということだよな。
- 生徒 B そうだね。「僕」はそれがうれしかったんだろうな。
- 生徒 A うん。だけど、「僕だけの宝物に見えた」という表現には違和感を覚えたよ。
- 生徒 B それはどうして？
- 生徒 A だって、このときまほりはグラウンドの中央にいるんでしょ？
だったら、「僕」以外にも彼女の笑顔は見えるはずだよな。「僕だけ」ではないと思うよ。
- 生徒 B いや、それはそうとは限らないと思うよ。【 B 】
- 生徒 A なるほど、そう言われれば確かに。でも、それだけで「僕だけの宝物」のような大げさな表現になるかな。
- 生徒 B それだけではないだろうね。実際に、「僕」にとって彼女の表情は特別なものだっただに違いないよ。

問① 【 A 】に入る言葉を五字以上十字以内で答えなさい。

問② 【 B 】に入る文章として最適なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの人は「僕」に注目しており、「僕」だけが中島まほりに注目しているからね。
- イ 多くの人はリレーの結果に熱狂しており、「僕」だけが中島まほりに注目しているからね。
- ウ 多くの人が中島まほりを見ているが、「僕」だけはより注視しているからね。
- エ 多くの人は冷静に中島まほりを見ているが、「僕」だけは興奮して彼女を見ているからね。
- オ 多くの人が「僕」に注目しており、「僕」も体育大会の熱気で興奮しているからね。

問③ ――部 「僕」にとって彼女の表情は特別なものだっただに違いないよ」とあるが、それはなぜだと考えられるか。八十字以内で説明しなさい。